



—昭和大学歯科病院の理念—

患者本位の医療
先進医療の推進
良き歯科医師の育成

発行責任者 病院長 榎 宏太郎
編集責任者 広報委員長 丸岡 靖史
〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1
TEL 03-3787-1151(代表) いちいちごいち

ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp/SUHD/index.html>

食べる力、生きる力、そして補綴歯科治療

補綴歯科 科長 馬場 一美

我が国は世界有数の長寿国であり、2016年の統計では女性の平均寿命は87.14歳、男性は80.98歳で、いずれも香港に次いで世界第2位です。健康寿命(健康上の理由で日常生活が制限されることなく過ごせる寿命)は女性74.8歳、男性72.1歳であり、厚生労働省は健康寿命を平均寿命に近づけるための様々な施策を講じています。

医療の目的は“延命”のみならず“長くなった人生をより良く生きる”こと、つまり生活の質を向上することへと変化してきています。歯科疾患は生活の質に直接的な影響を及ぼします。歯に痛みがあると通常の生活を営むことは不可能ですし、歯を失うと咀嚼が困難になり食事を楽しむことができません。口元の見え方も社会生活を送る上でとても大切です。歯科医療が生活の質を維持し、健康長寿のために大きな役割を担うことに疑いの余地はありません。

さらに、口腔の健康が全身健康に関連することも明らかにされています。歯周病が様々な全身疾患と関連していることが報告されていますし、抵抗力の低下した高齢者では、口腔衛生状態が悪いと生死に関わる誤嚥性肺炎のリスクが高まります。口腔衛生のみでなく、近年特に注目されているのは咀嚼機能管理の重要性です。咀嚼機能が低下すると低栄養の原因となり、その結果、フレイル(虚弱)と呼ばれる体重減少や疲れやすく活動性が低下した状態に陥りやすくなります。咀嚼機能の低下と認知症発症の関連性を示唆する研究成果も報告されています。我が国の認知

症高齢者数は465万人、65歳以上の高齢者の約7人に1人が認知症と推定されており(2012年、内閣府統計)、その予防のために咀嚼機能の維持は重要です。さらに、しっかり咀嚼することができれば唾液の分泌が促進され、お口の中が汚れにくくなり、誤嚥性肺炎の予防にも間接的に寄与します。まさしく、食べる力は生きる力なのです。



8020運動を始めとする様々な活動を通して国民の口腔健康状態は著しく向上しましたが、高齢化の急速な進行により歯の欠損をもつ患者数は増加傾向にあります。第1大臼歯1本を失うだけで咀嚼機能は顕著に低下しますが、こうした歯の欠損を義歯やインプラントで補う治療が補綴歯科治療です。65歳以上で1本でも歯を失った患者の75%が補綴歯科治療を受けていますが(2016年、厚生労働省統計)、その目的は歯の欠損により低下した生活の質を回復すること、そして“食べる力”つまり咀嚼機能を正常化して健康長寿を実現することです。



私たち補綴歯科は、冠橋義歯(かぶせものやブリッジ)、有床義歯(入れ歯)といった「補綴治療(歯が欠けたりなくなった場合にかぶせものや入れ歯などの人工物で補うこと)」についての全領域の研究・臨床・教育業務を担う部署です。顎関節症科、インプラントセンターといった診療部門についてもその一翼を担っており、国内でも数少ない補綴系が統合された診療科です。現在の常勤医局員数は23名であり、教授1名、准教授1名、講師4名、助教17名を擁します。また、大学院生は13名、さらに海外からの留学生が2名在籍しており、毎年10名前後の臨床研修医が半期ごとに配属されています(写真1)。

補綴歯科の外来は、日本補綴歯科学会、日本口腔インプラント学会、日本顎関節学会の指導医・専門医で構成される診療スタッフを中心に、大学院生や研修医の臨床教育を担うチーム診療制を採用しています。冠橋義歯、有床義歯、インプラントを包括する補綴系総合診療科であるメリットを最大限生かし、それぞれの専門性を維持しつつ、高度で先進的な欠損歯列患者のトータルケアを行えることが強みです。

私たちは“持続的な「変化」と「進歩」”をモットーとし、基盤となる治療技術を高いレベルで提供することを目標としています。世界に目を向けると、患者ニーズに対応した新たな技術が日々開発されておりますが、これらについても積極的に取り入れ常に最先端の医療を提供できる環境を整備しなければなりません。

現在、私たちの臨床で力を入れている臨床技術としてインプラント・オーバーデンチャー(Implant Overdenture: IOD)やインプラント・アシステッド・パーシャルデンチャー(Implant Assisted Removable Partial Denture: IA-RPD)が挙げられます。従来のように入れ歯かインプラントのいずれかを選択するのではなく、最小限の本数のインプラントを

入れ歯に組み込み、通常の入れ歯より安定して動きづらい入れ歯を提供する治療法で、新たなインプラントの利用法としてインプラント普及へのブレークスルーとなり、更に多くの患者さんがインプラントの恩恵を享受できるのではないかと期待しています。

また、デジタル歯科分野にも力を注いでおり、広く臨床に普及したかぶせものやブリッジのコンピュータ製作だけでなく、光学印象装置(三次元カメラで型どりを行う装置)の導入やデジタル化が進んでいない入れ歯の分野におけるデジタル技術の開発も行っています(写真2)。

このような最新技術の臨床応用・臨床普及を通じて、すべての欠損補綴患者さんが「最小の負担で最高のテーラーメイド治療」を受けられる補綴専門診療科となることが私たちに課せられた使命であることを胸に刻み、日々の臨床に取り組んでいます(ホームページ、<http://prostho.showa-u.ac.jp>)。



写真1 補綴歯科スタッフ



写真2 デジタル技術を用いて製作したジルコニア義歯

診療科紹介:スポーツ歯科外来

スポーツ歯科外来 診療科長補佐 助教(歯科) 佐藤 多美代

昭和大学では、平成23年9月に歯科病院のスポーツ歯科外来が開設されました。その後、平成27年4月にスポーツ運動科学研究所が開設され、平成28年1月に藤が丘リハビリテーション病院に2カ所目となるスポーツ歯科外来が開設されました。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、国民のスポーツに対する関心は一層高まりつつあります。オリンピックをはじめとする主要な国際大会に日本代表選手が参加する場合、内科、整形外科および歯科のメディカルチェックを受けることが義務付けられております。つまり、良好な口腔内環境が重要です。

また、スポーツ競技中に口腔内に装着する装置はスポーツマウスガードと呼ばれ、以前よりアメリカンフットボールなどのコンタクトスポーツを中心に使用されてきました。最近では様々なスポーツにおいて、マウスガード装着が義務化や推奨化されています。当院にはアスリートだけでなく、成人のスポーツ愛好家から部活動や習い事でスポーツを楽しむお子様まで、多くの方が受診されております。乳歯と永久歯の生え変わり中のお子様や矯正治療中のマウスガード製作も可能ですので、どうぞお気軽にご相談下さい。

—スポーツマウスガードの特徴—

歯・歯周組織の保護、口唇・舌・頬の損傷防止、顎関節の保護、顎骨骨折の予防、食いしばり時の力の発揮、全身のバランスの調整および脳震盪の軽減などの効果が期待されております。スポーツ

用品店などで販売されている既製品(図1)もありますが、これらは歯列への適合性が悪いため違和感が強く、外傷予防効果も低くなるため、当院では上下歯列の型取りをして作製するカスタムメイドタイプマウスガード(図2)を作製しています。

1. 医療面接

競技種目やポジション、現在のスポーツ環境、マウスガードの使用経験等を伺います。マウスガードの外形や厚みの参考にします。

2. デンタルチェック

虫歯や歯周病がないか、歯並びや噛み合わせに問題がないかを検査します。レントゲン撮影などの精密検査を行うこともあります。もし治療が必要な状態であれば、マウスガード作製前に行わなければなりません。

3. 上下歯列の型取りと噛み合わせの記録

治療が終了したら、上下歯列を型取りし、噛み合わせを記録します。マウスガードは主に上顎に装着しますが、下顎に装着するケースもあります。模型上で上顎のマウスガードを作製し、ある程度下顎との噛み合わせを調整します。

4. マウスガード装着

マウスガードは型取りを行ってから約1週間で完成します。口腔内に装着して適合を確認し、噛み合わせの微調整を行います。



図1. 既製品



図2. カスタムメイドタイプ

部署紹介: 歯科衛生室

歯科衛生室 責任者 鈴木 恵美

私たち歯科衛生士は、患者さんの「話す」「食べる」などの口腔機能の維持・回復の手助けをし、乳幼児期から高齢期まで、人の一生を通じて、すべてのライフステージに関わっています。そして、近年では、様々な調査研究から「歯・口の健康と全身の健康の関係」が明らかになり、患者さんの口腔機能状態の改善や症状の緩和支援に、予防の専門家である歯科衛生士がかかわる機会は年々増加しています。

☆幅広い業務にかかわる

現在、当院には35名の歯科衛生士が従事し、診療の補助・介助業務(歯石除去、口腔内写真撮影、セメントや印象材の練和など)、口腔衛生指導、PMTC(機械的歯面清掃)、インプラント患者さんのメンテナンス、術前・術後の口腔ケア、摂食嚥下機能療法訓練、MFT(口腔筋機能療法)、ホワイトニング施術、訪問歯科衛生指導など、多岐にわたって業務を行っています。また、患者さん向けの口腔衛生活動として、リーフレットを作成し、お口の健康に関する情報提供をしています。その他には、医療安全や院内感染予防対策を他職種と考え協力し、環境整備なども行っています。

☆科学的根拠に基づいた口腔管理

当院のお口の健康センターでは、「口元からより美しく、より健康に！」をスローガンに予防業務を確立し、科学的根拠に基づいた口腔管理を行っています。また、今年の4月には、当院矯正歯科でCAMBRA™(リスク評価に基づくう蝕管理方法)という、う蝕の予防管理プログラムを開始しました。これは現在、米国の歯科大学65校中40校が教

育プログラムとして既に導入され確立されているプログラムで、日本の歯科大学病院での導入は本学が初となります。これらの予防業務にも歯科衛生士が携わっています。

最後に、歯科衛生士は今後益々、チーム医療の一員としての職性の発揮が求められ、歯科衛生士の活躍の場も広がっていきます。今後も、日々、自己研鑽を積み、患者さんの健康維持増進を担う職種として社会に貢献していけるよう努力していきます。そして、患者さんやそのご家族が、大切な方々と笑顔で楽しく「会話」や「食事」ができるような支援や患者さんが安心安全に受診していただけるような病院作りを目指していきたいと思えます。



妊婦さんへの歯磨き指導の様子



歯科衛生室スタッフ

編集後記

立秋とは名ばかりの猛暑が続き、40℃超えのニュースが聞くのも珍しくなくなりました。蝉も35℃を超えると活動が鈍るようで、今年は心なしか蝉の声をあまり聞かない気が致します。水分補給等の熱中症対策を十分に行い、ご自愛いただければと思います。(M. S)

